

昔むかし、そまつな小屋に、男とおかみさんが住んでいました。ふたりがどんなに働いても、暮らしは楽になりませんでした。というのは、牧草地の丘の上に、山んばが住んでいて、ふたりがかせいだ物をみんな持って行ってしまいうからでした。

ある日のこと、男がおかみさんにいました。

「ねえ、おまえ。こう食べる物がなくちゃ、生きていけないよ。それでね、ちよつと頭に浮かんだんだが、つがいのにわとりを買ってきて、台所の屋根の下が一番暗いところで飼わないかい。そこなら、山んばにだつて見つけられないからな」

おかみさんは、それはすばらしい思い付きだと思いました。男は、台所の屋根の下に囲いを作って、にわとりを買ってきて入れました。それから、いつものように森に木を切りに出かけました。男は、出かけるときに、おかみさんに、

「めんどりが卵を産んだら、ゆで卵を作っておいておくれ」とたのみました。

「あいよ」と、おかみさんは答えて、さっそくかまどに火を起こしました。

さて、山んばは、丘の上から、男の小屋から煙がのぼっているのを見つけました。

「おや、小屋から煙がのぼっているぞ。急いで出かけて行って、何を料理しているのか、のぞいてみよう」

山んばは、どしん、どしんと牧草地を越えてやって来て、煙出しの穴から下をのぞいていました。

「おうい。いったい何を料理しておるんじや」

おかみさんは、びっくりぎょうてんして、いいました。

「ああ、亭主のぼろシャツを洗うので、洗濯用のお湯を温めてるのさ」

「うそをつけ」

山んばは、そういうと、どたばたと台所に入ってきました。おかみさんは、あわてて、「うちのにわとりの側でそんなにどたばたしないですよ」とさげびました。

「なんだつて。にわとりがいるのかい。それじゃ、あたしがめんどろを見てやるよ」

山んばは、そういうと、にわとりを見つけて、両脇に一羽ずつ抱えて帰っていききました。

まもなく、男が森から帰って来ました。そして、テーブルにつくと、

「腹がへった。ゆで卵をおくれ」といいました。

「あんた、ゆで卵はないんだよ。だって、山んばが来て、にわとりを持って行っちゃったんだもの」

「おまえ、にわとりのこと、しゃべったのかい」

「いいえ、いいえ。わたしは、ただ、うちのにわとりの側でそんなにどたばたしないでつていっただけよ」

「なんだって。それでじゅうぶんじゃないか」と、男はいいました。

それから二、三日たって、男はおかみさんにいいました。

「ねえ、おまえ。またひとつ、頭に浮かんだんだが、雌牛めうしを一頭買ってきて、小屋の隅の水樽みずだるの側で飼わないかい。そこなら、山んばにだって見つけれないからな」

おかみさんは、それはすばらしい思い付きだと思いました。男は、雌牛を買ってきて水樽の側につなぎました。それから、森に木を切りに出かけました。男は、出かけるときに、

「ミルクのおかゆを作っておいておくれ」とたのみました。

「あいよ」と、おかみさんは答えて、さっそくかまどに火を起こしました。

さて、山んばは、丘の上から、男の小屋から煙がのぼっているのを見つけました。

「おや、小屋から煙がのぼっているぞ。急いで出かけて行って、何を作っているのか、のぞいてみよう」

山んばは、どしん、どしんと牧草地を越えてやって来て、煙出しの穴から下をのぞいていいました。

「おうい。いったい何を料理しておるんじや」

おかみさんは、びっくりぎょうてんして、いいました。

「ああ、亭主のぼろズボンを洗うので、洗濯用のお湯を温めてるのさ」

「うそをつけ」

山んばは、そういうと、もう台所に入ってきて、あちこちひっかきまわしました。おかみさんは、あわてて、

「うちの雌牛のおしりを押さないでよ」とさげびました。

「なんだって。雌牛がいるのかい。それじゃ、あたしがめんどろを見てもやるよ」

山んばは、そういうと、雌牛を見つけ出し、手綱たづなを取って連れて行ってしまいました。まもなく、男が森から帰って来ました。

「腹がへった。ミルクがゆをおくれ」

「あんた、ミルクがゆはないんだよ。だって、山んばが来て、雌牛を連れて行っちゃったんだもの」

「おまえ、雌牛のこと、しゃべったんだろう」

「いいえ、いいえ。わたしは、ただ、うちの雌牛のおしりを押さないでっただけよ」

「それでじゅうぶんだ」と、男はいいました。

しばらくたったある日のこと、男はおかみさんにいいました。

「ねえ、おまえ。もうこれいじよう暮らしていけないよ。それで、またひとつ、頭に浮かんだんだが、やぎを一頭買ってきて、台所の床下に穴を掘って、そこで飼わないかい。そこなら、山んばにだって見つけれないから。おまえがしゃべりさえしなければな」

おかみさんは、それはものすごくいい思ひ付きだと思いました。そして、やぎのことはぜったいにしゃべらないと、何度も約束しました。男は、やぎを買ってきて台所の床下に穴を掘り、やぎのねぐらを作りました。それから、森に木を切りに出かけました。男は、出かけるときに、

「あたたかいミルクを作っておくれ」とたのみました。

「あいよ」と、おかみさんは答えて、さっそくかまどに火を起こしました。

さて、山んばは、丘の上から、男の小屋から煙がのぼっているのを見つけました。

「おや、小屋から煙がのぼっているぞ。急いで出かけて行って、何を作っているのか、のぞいてみよう」

山んばは、どしん、どしんと牧草地を越えてやって来て、煙出しの穴から下をのぞいていました。

「おうい。いったい何を料理しておるんじや」

おかみさんは、びっくりぎょうてんして、いいました。

「ああ、亭主のぼろくつしたを洗うので、洗濯用のお湯を温めてるのさ」

「うそをつけ」

山んばは、そういうと、もう台所に入ってきました。おかみさんは、あわてて、

「うちのやぎを踏まないでよ」とさげびました。

「なんだって。やぎがいるのかい。あたしがめんどろを見てやるよ」

山んばは、そういうと、床板をはずして、やぎを見つけて連れて行ってしまいました。まもなく、男が森から帰って来ました。

「腹がへった。ミルクをおくれ」

「あんた、ミルクはないんだよ。だって、山んばが来て、やぎを連れて行っちまったんだもの」

「おまえ、やぎのこと、しゃべったんだろう」

「いいえ、いいえ。わたしは、ただ、うちのやぎを踏まないでっただけだよ」

「それでじゅうぶんだ」

男は、腰をおろして、しばらく考えていました。それから、おかみさんにいいました。

「うちにある一番大きなべをかまどにかけて、くずやごみを燃やすんだ。台所じゅうを煙でいっぱいにして。それがすんだら、おまえは、だまって立っていればいい」

おかみさんは、いわれたとおり、一番大きなべをかまどにかけ、くずやごみを集めてきて火をつけました。台所の中は、自分の手も見えないほど、煙がもうもうと立ちこめました。男は、そのあいだに、魚とりの大きな網を取ってきて小屋の入り口にはりつけました。そして、おのを手に、ドアの後ろに隠れていました。

さて、山んばは、丘の上から、男の小屋から煙がのぼっているを見つけました。

「おや、あの小屋から、あんなにたくさん煙がのぼっていたことはない。何を作っているのか、のぞいてみよう」

山んばは、どしん、どしんと牧草地を越えてやって来て、煙出しの穴から下をのぞいていました。

「おうい。いったい何を料理しておるんじや」

「ああ、亭主のぼろ服を洗うので、洗濯用のお湯を温めてるのさ」

「うそをつけ」

山んばは、そういうと、戸口から入ってこようとしました。ところが、網にからめとられて、ばたんと転がりました。そのとたん、男がおのを振り下ろし、山んばの首はすっ飛びました。

男とおかみさんは、山んばの丘に行ってみました。すると、そこには、やぎも、雌牛も、にわとりもいました。山んばがふたりから盗んだあらゆるものがありました。しかも、黄金や宝石までありました。ふたりは、それを全部手に入れて、それからのちは、

幸せにゼいたくに暮らしたということです。

これで、山んばの話はおしまい

村上郁再話

資料『世界の民話32アイスランド』谷口幸男／ぎょうせい